

地域政策による観光業と農業の共生

フランス・アルプス・セイヤックの事例研究

石 原 照 敏

はじめに

ヨーロッパ・アルプス地域では東部（オーストリア・アルプス、ドイツ・アルプス）よりも中部（スイス・アルプス）で、さらに中部よりも西部（フランス・アルプス）で、工業化・都市化の影響が強く、農民層分解、農家減少が進んだ。

しかし、フランス・アルプスでも、早いところでは第2次世界大戦が終わった1940年代後半より、とりわけ1960年代に入り、第5次計画V^e plan（1966-1970）以降、観光開発の進展とともに、農家は減少したが、コミューンの人口は増加に転じたところが少なくない。

これは設備省や観光省などがイニシアチブをとって、土地の優先取得権・先買権の行使、補助金の交付などによって推進された統合スキー場（Stations intégrées）の建設を中心とする観光開発によるところが大きい。

統合スキー場では唯一のプロモーターによって建設された宿泊施設・リフト・スキー場が統合された形で配置されており、スキーヤーにとっては機能的であることはたしかであろう。しかし、これらのスキー場は既存集落から隔たった森林限界線より上位にある場合が多く、地元住民の生活向上にはあまり役立たなかった。農家は土地を売却し、農牧活動を放棄したものが少なくない。スキー場を建設するために林地や草地が改変されたため、生態学的な問題も発生した。

これと比べて、DATAR（国土庁）の農村刷新局（Commissariats à la rénovation rurale）に

よって農村刷新政策の一環として1967-1976年の間に実施されたStations-Villages（観光・定住集落）の建設は、前述した設備省や観光省がイニシアチブをとった観光開発と同時期に行われたにもかかわらず、それとは異なり、観光業と農業の共生を図ろうとする試みの先駆けをなすものであり、注目される。さびれたコミューンの刷新のために、伝統的農村景観と人文的価値を保持しながら、定住集落に観光用施設を配備して、地元住民が農業・職人活動にプラスして観光活動にも従事できるようにし、住民に職業と雇用を得させることを目標とするものであったからである。

本稿は、その代表的な事例である南アルプス、ケイラ地方（Queyras）、セイヤック・コミューン（Ceillac）のStations-Villages（観光・定住集落）について調査し、観光業と農業の共生について考察したものである。

ケイラ地域自然公園の創設と人間生活

1．ケイラ（Queyras）地方

ケイラ（Queyras）という名称の起源は、ケルト語で石を示すCairあるいはCairnに由来するという¹⁾。ケイラにも、緑の森林やアルプ放牧地（Alpage）もあるが、岩がちな山が広い面積を占めていることはたしかである。フランスの北アルプスから南アルプスへ移動してきて、ケイラでひととき目立つのは岩がちな山である。

ケイラは、フランスの南アルプス（プロバン

ス・アルプ・コートダジュール州)の北部に位置するオート・アルプ県(Hautes-Alpes)の東端(イタリアとの国境のあたり)にあり、ローヌ川の支流であるデュランス川の上流部分に流入するギュイ川(Le Guil)の流域からなる(図1)。

ケイラの北・東・南東部分にある標高3,000m級の高峰がイタリアとの国境をなしている。ケイラの北側にブリアンソン地方Briançonnais、東側にピエモンテ地方(イタリア)、南側にユベイエUbaye地方がある。

ケイラの山地は、フランス・北アルプスの山地と比べると、頂上の標高が高くないし、降水量が少ないので、侵蝕による開析が進んでいない²⁾。これは地中海性気候の影響によるものである。やや標高の低い西部ケイラ(低地ケイラともいう)では、夏乾燥した地中海性気候の影響が、そこに広く分布している石灰岩のような剥離した、浸透性の岩石によって強化されて、植物の少ない岩がちの土地が広がっている。われわれが本稿で問題にするセイヤックCeillacは、西部ケイラ(低地ケイラ)に含まれている。一方、東部ケイラ(高地ケイラ)には片岩が多い。

表1のように、1962年に、ケイラの面積の68.7%はランド(その約半分は共有放牧地)、19.6%は森林であって、農・耕地(耕地、草地)は11.7%にすぎなかった。1980年には、明らかに、農・耕地が全面積の4.1%にすぎなくなっており、森林が全面積の21.4%へと増加していることがわかる(表2)。これは人口の減少、農牧業の衰退によるものと考えられる。

ギュイ川とその支流に沿って、標高1,000-1,700mくらいのところ集落がある。低いところにある集落の付近にはモミヤトウヒが自生しており、より高いところにはカラマツの林がある。さらに、高山帯にはハイマツ、石南花、みやまうすゆきそう、アルプスおだまき、りんどう、ゆきのしたなどのアルプス山地型フローラがみられる³⁾。

ブランシャールによると1954年に全人口の中

での農業人口の割合はフランス・アルプスの中でケイラが最も高く72%であった。また、ブランシャールによるとフランス・南アルプスでは経営農地の中で草地の割合がフランス・北アルプスと同じように高い(90%以上)のはケイラとその南にあるユベイエUbayeだけである⁴⁾。北アルプスには乳牛などの牛類が多いが、南アルプスのケイラには羊が多い。

2. ケイラ地域自然公園の創設

国立公園が自然を保護するために、人口減少地域を保護することを目的としているのとは比べて、地域自然公園は自然遺産の保存と開発により観光などのさまざまな活動の発展を保証しながら、人口減少の恐れのある若干の地区において人間生活を維持することを目的としている。

ケイラは面積650km²、平均高度2,100m、夏は太陽に恵まれ、前述したようにフローラのじゅうたんに覆われる。そこで、アルプ放牧地やカラマツの林を横切って山あるき(Randonnée)が行われるのである。冬は平均2.6m(厚いところでは3.75m)の雪に覆われるので、スキー客が訪れる。山地によって保護されたケイラでは、家々の建築様式は、骨の折れる山地生活に適応している。遍在する木材職人によって芸術的な家具や玩具がつくられた。アルプ放牧地の豊かさはケイラのチーズの風味の中に生かされており、伝統的な料理は古くからの味覚を保存している。

以上のような特徴のあるケイラに1967年3月1日付の政令に基づいて、ケイラ地域自然公園(Le Parc Naturel Régional du Queyras)が創設されたのは1977年のことであり⁵⁾、フィリップ・ラムール氏Philippe LAMOUR(セイヤック村長)の尽力によるところが大きい。

その結果、半官半民の組合(Syndicat Mixte)が、ケイラ地域自然公園の管理に責任をもち、コミューン、コミューン連合区(District du Queyras)に支えられて、自然・文化遺産の開発と保全の政策が推進されている⁶⁾。

1/100,000 1 cm = 1 km
出所) Grenoble-Gap, Institut Géographique National, Paris, 1977.



図1 セイヤックとギエイエストル

表1 ケイラ地方におけるコミューン別土地利用（1962）

コミューン	標高 (中心集落)	人口 (1962)	土地台帳 面積	畑地	草地	菜園等	全農・ 耕地	ランド (共有放牧地)	森林	その他
Abriès	1,550 ^m	205 ^人	7,508 ^{ha}	209 ^{ha}	807 ^{ha}	2 ^{ha}	1,018 ^{ha}	5,535 ^{ha} (3,550)	944 ^{ha}	11 ^{ha}
Aiguilles	1,479	324	3,970	191	593	3	787	1,977 (1,485)	1,192	14
Arvieux	1,551	413	7,540	443	318	2	763	5,332 (1,430)	1,436	9
Ceillac	1,640	202	8,775	194	189	1	384	5,897 (2,760)	2,484	10
Château- Ville-Vieille	1,349	313	6,525	415	597	2	1,014	3,361 (1,887)	2,140	10
Molines	1,725	269	5,226	269	601		870	3,746 (3,015)	603	7
Ristolas	1,595	49	8,335	137	674	1	812	6,356 (3,410)	1,151	16
Saint-Véran	2,040	236	4,402	168	292	1	461	3,666 (1,780)	262	13
計		2,011	52,181	2,026	4,071	12	6,109	35,870 (19,317)	10,212	90

注1)()内は内数
資料) Guillaume, Général A., *Le Queyras*, Gap: Société d Etudes des Hautes-Alpes, 1985, p. 156.

表2 ケイラ地方におけるコミューン別土地利用（1980）

コミューン	森林面積 (1980)	経営農・耕地面積(1980)			土地台帳 面積(1980)	農業経営数	
		畑	草 地	全農耕地		1970	1980
Abriès	2,007 ha	10 ha	216 ha	228 ha	7,506 ha	16 戸	12 戸
Aiguilles	1,130	10	124	135	3,990	8	9
Arvieux	1,821	151	236	389	7,148	36	50
Ceillac	2,084	41	330	372	9,604	23	35
Château- Ville-Vieille	1,780	39	297	336	8,320	23	23
Molines	970	6	352	360	5,243	22	32
Ristolas	1,436	4	187	192	7,873	6	8
Saint-Véran	349	4	225	230	4,410	15	21
計	11,577	265	1,967	2,242	54,094	149	190

資料) Guillaume, Général A., *ibid.*, 1985, p. 157.

3. ケイラ地方の人口と観光業の発達

ケイラ地方の集落は、大体、標高1,349m（Château-Queyras）と標高1,725m（Molines）の間に立地しており、ケイラの人々の約6割は標高1,600m以上のところで暮らしている。耕作はかつては標高約2,200mのところまで達していたし、夏の間、アルプ放牧地での放牧は標高約2,500mのところまで達している。

コミューン別にみると表3のようにケイラ地

方では、1936年から1968年まで人口が減少するが、その後大体は増加し、主要8コミューンのうち1968-1982年の間では、とくにモリーヌ・アン・ケイラ（Molines en Queyras）、セイヤック（Ceillac）、アブリエ（Abriès）、エイギユ（Aiguilles）などのコミューンでかなり人口の増加がみられる。これらのコミューンは実は観光業が発達したコミューンであることに特徴がある。このことは夏のリゾート・山歩き、冬の

表3 人口の推移

コミューン	1936	1946	1954	1968	1975	1982	1999	1968-1982 (1968 = 100)	1982-1999 (1982 = 100)
Abriès	370人	275人	264人	195人	207人	271人	297人	139.0 %	110.0 %
Aiguilles	324	284	300	249	275	310	377	124.5	121.6
Arvieux	577	549	487	412	324	351	338	85.2	96.3
Ceillac	249	221	224	208	234	292	289	140.4	99.0
Château- Ville-Vieille	555	374	438	304	283	268	271	88.2	101.1
Molines	401	367	323	244	288	375	336	153.7	89.6
Ristolas	158	50	59	50	68	52	72	104.0	138.5
Saint-Véran	412	379	255	220	232	275	257	125.0	93.5
計	3,046	2,499	2,350	1,882	1,911	2,194	2,237	116.6	102.0

資料) Institut National de la Statistique et des Etudes Economique, Recensement de la population.

スポーツ（スキー）の発達によるものである。ケイラの渓谷に自動車によって接近することができるようになった1900年頃、夏の涼しさにひきつけられて、マルセイユやパリや外国から家族連れなどの観光客が、近代的ホテルが建設されたアプリエやエイギユに來訪するようになった。一方、冬のスポーツ（スキー）は1900年にノルウェーの士官によって、ブリアンソンのアルプス部隊に導入され、1907年頃にはケイラでスキーが始まり、今日の盛況にたちいたっている⁷⁾。

観光・定住集落における観光業と農業

1. セイヤック・コミューンとその農業経営

ケイラ地方の大部分が、エイギユ・カントン（Canton d'Aiguilles）に属しているのに対して、セイヤック（Ceillac）は、ギユイエストル・カントン（Canton de Guillestre）に属しており、ギユイエストルとの関係が強かった⁸⁾。セイヤックというコミューンは、クリスティヤンChristillanという谷とメレーゼーMélèzetという谷の合流点（海拔1,640mで、古い氷河の跡であるとか古い湖の底であったといわれている⁹⁾）に位置している。

セイヤックという名は8世紀以来、Patrice

Abbonという人の遺言書の中にSalliarisの形で現れ、その存在は、1118年12月20日の日付がある、ローマ教皇ジェラズ2世（Gélase）の公文書によって確認されているという¹⁰⁾。

農業についてみると、セイヤックでは表4のように乳牛頭数は皆無となったが、羊頭数はあまり減少していない。とはいえ、羊飼養経営は1970年から1988年にかけて著減していることがわかる。また表5のように作物はほとんど栽培されていない。ここでは生計を維持するために最低限30ha以上の農業経営規模が必要である。ところが、セイヤックでは1979年に、全農業経営数23戸のうち、20ha以下の経営層が15戸で全体の65%を占めているのに、20-35ha経営層は8戸で全体の35%にすぎず、1988年には、20-35ha経営層は全体の21%以下に減少している（表6）。

セイヤックを含むケイラ地方では傾斜地のため経営しない土地を含めて、所有者の土地全体を購入しなければならない習慣があるので、所有農地、ひいては経営農地の拡大がさまたげられている¹¹⁾。

2. 観光業の導入

1957年6月の洪水がセイヤックの集落に壊滅的な打撃を与えたので、このことを契機として、県農業局（Direction départementale de l'Agriculture）の指導の下に、村議会の責任で、

表4 家 畜

	経 営			家 畜 数		
	1970	1979	1988	1970	1979	1988
牛 総 数	25 戸	13 戸	0 戸	132 頭	99 頭	0 頭
乳 牛	23	13	0	84	64	0
羊 総 数	27	19	18	1,058	1,659	1,344
母 羊	27	19	18	693	1,016	1,065
豚	S	S	S	S	S	S
鶏	24	22	15	346	345	222

注) Sは統計の秘密のため不明の数
資料) Recensement Agricole 1970, 1980, 1988.

表5 作物と土地利用

	経 営			面 積		
	1970	1979	1988	1970	1979	1988
穀 物	33 戸	21 戸	17 戸	22 ha	27 ha	12 ha
大 麦	33	21	17	20	25	12
飼料作物 ¹⁾	31	10	13	24	10	24
牧 草 ²⁾	34	23	18	355	330	205
じゃがいも	34	22	0	6	4	0
ぶ ど う	6	1	0	2	0	0
菜 園	30	23	18	1	0	4
耕 地	34	22	17	53	41	37
農・耕地	34	23	18	410	372	245

注1) 人工草地 (Prairies artificielles) で栽培されたもの
注2) 自然草地 (Prairies naturelles) で成長したもの
資料) Recensement Agricole 1970, 1979, 1988.

表6 経営規模別農業経営

	経 営			経営土地 (1979)
	1970	1979	1988	
5ha以下 ha	S 戸	2 戸	S 戸	3 ha
5-10	S	2	S	16
10-20	18	11	15	156
20-35	S	8	S	196
35-50	0	0	0	0
50ha以上	0	0	0	0
計	35	23	19	371

注) Sは統計の秘密のため不明の数
資料) 1970年, 1988年はRecensement Agricoleによる。
1980年は, Guillaume, Général A., Le Queyras, op. cit., p. 159より。

耕地整理 (Remembrement) が実行された。この事業は1965年には終了した。

この事業によって, 土地区画は拡大し, 農業は機械化し易くなったとはいえ, 農業だけで生計は維持できなかった。そこで, 1965年に, 村

長となったフィリップ・ラムール氏 (Philippe LAMOUR) によって, セイヤック・コミューンの刷新のために, 夏と冬に, 観光客を受容するための設備を備えた観光集落を創出し, 農業・職人活動に観光活動を結びつけ, 住民に職業と雇用を得させるという目標が設定された。この目標はコミューンの伝統的な農村景観と人文的価値を保持しながら実行されねばならないものとされた¹²⁾。

その際, 伝統的な農業活動はこれを近代化しながら, 家族経営として維持するものとされた。また, 重要なことはセイヤックで維持されるであろう家族経営がコミューンの天然資源 (Ressources naturelles) の全体を有効に開発しつづけることができるかどうかということであった。

セイヤック・コミューンでは観光集落は要す

るにセイヤック人のために建設されるもので、経営上有利な場所に量的に合理的なスポーツ施設をつくり、それを利用するために必要かつ十分な宿泊施設などの観光用施設を備えることを目的とするものであった。こうして、中心的な定住集落・セイヤックの住宅の一部が商店、レストラン、カフェ、バー、民宿などの観光利用施設に改装されたり、この集落の東・南周辺部などに、観光利用施設が新築されて、観光・定住集落（Stations-Villages）・セイヤックが形成された。この中心集落は地元ではVillageとよばれており、ここに村役場（La Mairie）、観光案内所（Office Municipal de Tourisme）を中心にして、商店（スポーツ店、パン屋、食料品店、土産物品店）、レストラン、カフェ、バー、宿泊施設（民宿が主）などの観光利用施設がある。このほか、セイヤック・コミュニケーションには中心集落の北西に隣接して、あらたにホテル（レベイレLes Veyres）、アパート、シャレーなどが建設された観光集落・ロシェット（L Ochette）、さらに、この観光集落の南西にある、小定住集落が民宿のある集落となった観光・定住集落ラ・クラピエールLa Clapière、中心集落・セイヤックの南東約2 kmのル・メレーゼーLe Mélézetに

あるホテル・ラカスカードLa Cascode、民家1戸とリフト施設からなる小集落などがある。

土地の所有者は土地で寄与し、その持寄財産に応じて建設された観光利用施設の所有者となる。こうして、観光利用施設（ホテル、バー、カフェ、商店など）はセイヤック人の家族が、個人的にか、地方所有者の組合によってか、所有者であり、経営者であることになる。セイヤックには表7のように宿泊施設の中では民宿の数が圧倒的に多い。民宿は、その所有者・経営者が地元におり、宿泊定員規模が、10人以下で零細であるものが表7・8のように6割を占めている。前述したホテル・レ・ベイレは地元起源である。ホテル・ラ・カスカードも地元起源であり、パリに本社があり、農村環境における家族経営のホテルのチェーンであるロジ・ド・フランスLogis de franceに加盟している。集合宿舎・ル・シウール（Le Thioure）は、コミュニケーション・レジデンスである。賃貸アパートにはケイラ・レジデンス（Queyras Residences）のものがセイヤック集落の東側周辺部（Immeuble “Le Christillan”）とロシェット（L Ochette）にあり（Immeubles “Le Cheynet”）、パリに本社があり、ソーシャル・ツーリズムをつかさどる

表7 宿泊施設（規模別）

宿泊定員	ホテル	集合宿舎	賃貸アパート	民 宿	ユースホステル	キャンプ	山小屋	計
100以上 人		1			1	2		4
51-100	1	1			1			3
31-50	1	1		3				5
11-30			3	22			1	26
6-10				24				24
3-5				27				27
2以下				3				3
計	2	3	3	79	2	2	1	92

資料) Office du Tourisme (Ceillac) の資料により筆者作成

表8 民宿の所有者の住所

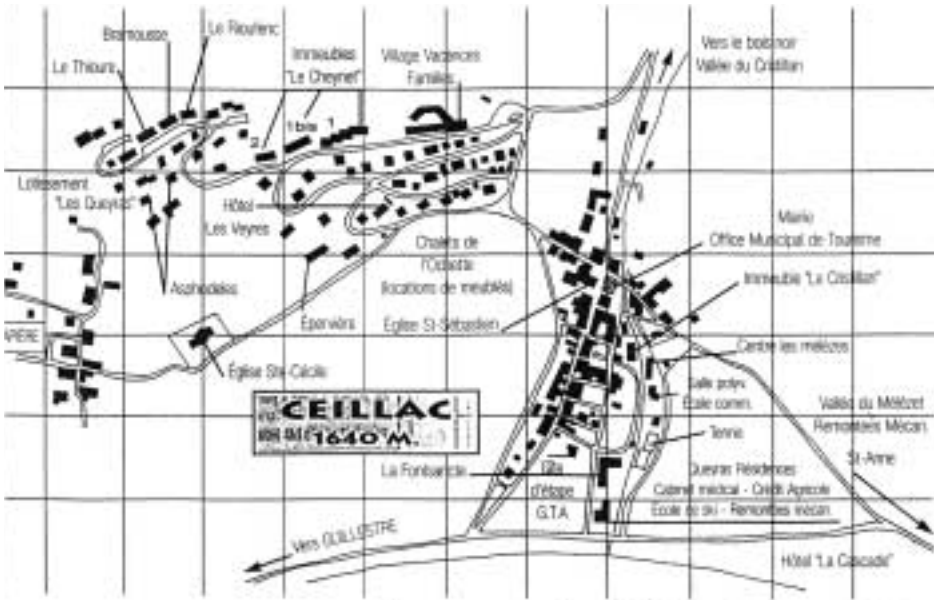
プロバンス・コート・ダジュール州			ローヌ・アルプ州	その他
セイヤック	ギュイエストル	その他		
49	4	10	10	6
63				

資料) Office du Tourisme (Ceillac) の資料により筆者作成

Village Vacances Familles社のものがロシェットにある(図2)。雇用については、冬期間はスキー・モニター、スキー滑走路の作業員、リフト運転手などとし

て、夏期間は樵夫、木工職人などとして雇われるものもある。定員稼働率をみても、表9のように、夏期の7、8月と冬期の12、2月に100%またはそれに

図2 セイヤック(中央)とオシェット(西北寄り)の宿泊施設



1 cm = 100m
出所) Office de Tourisme de Ceillac, Ceillac en Queyras, 2000, p. 11.

表9 定員稼働率 1999年

月	宿泊定員	宿泊者数	定員稼働率
1	3,750	375	10 %
2	3,750	3,750	100
3	3,750	1,400	37
4	3,750	0	0
5	3,750	0	0
6	4,350	1,400	32
7	4,350	4,350	100
8	4,350	4,350	100
9	3,750	1,125	30
10	3,750	0	0
11	3,750	0	0
12	3,750	3,000	80
	3,900	1,646	42

注) 宿泊定員は、ホテル・民宿・賃貸アパートなど2,450、別荘1,300である。夏季の7・8月はキャンプ宿泊定員600が加わる。

資料) Office du Tourisme (Ceillac) の資料によって石原照敏が作成した。

近い。このことはセイヤックの観光が繁昌していることを示している。しかも、観光利用施設はセイヤック人によって所有・経営されている場合が多く、観光利用施設ではセイヤック人が雇用されている場合が多い。観光開発はセイヤックのために役立っていることは間違いない。

3. 観光業と農業 集落職業調査より

中心集落・セイヤックの職業調査により、観光業と農業の共存・共生関係を明らかにしよう。

この集落は図3のようにクリスティヤンという谷に、メレーゼーという谷が合流する地点の北側にあり、集落の西側(下流)と東側(上流)に農地(草地)が開けている。2000年8月現在で総戸数は53戸で、セイヤック・コミューン

100戸の53%を占めている。総戸数53戸をその家族の主たる職業によって分けると表10の通りである。民宿19戸，食料品店2戸，スポーツ用品店4戸，工芸・木工店7戸，バー・レストラン5戸，建設業3戸など40戸が観光業に関連しており，農家は8戸にすぎなくなっている。

図3のように，合流点よりやや標高の高い扇状部分の道路交叉点の西側にある，ラムール村長を記念したラムール広場に面して，教会，村役場，郵便局，観光案内所があり，そこから

南・北に伸びた道路の両側に，旧農家があり，その大部分は民宿に変わっている。この集落の東側と南側の川沿いの部分に，新しい賃貸アパート（レジデンス），商業センター，農業銀行，病院分室，などが立地している。このように，この中心集落は，農民の定住集落であったが，今日では観光・定住集落となっていることが景観からもよくわかる。この集落には農家は表11のように8戸残っているにすぎない。そのうち，純粋に農業だけを営んでいる専業農家は

図3 観光・定住集落セイヤック



注) 民家とは，民宿，農家以外の普通の民家をさす
資料) 2000年8月，石原照敏の調査による

表10 主たる職業（セイヤック）

農 業	8 戸	15.1 %
民 宿	19	35.8
食 料 品 店	2	3.8
ス ポ ー ツ 用 品 店	4	7.6
工 芸 ・ 木 工 店	7	13.2
パ ー ・ レ ス ト ラ ン	5	9.4
建 設 業	3	5.7
そ の 他	5	9.4
計	53	100.0

資料）石原照敏の聞取調査（2000年 8 月）による

4 戸である。世帯番号 3（高齢男性 1 人，羊 40 頭飼養），世帯番号 5（高齢男性兄弟，羊 150 頭飼養），世帯番号 6（50 歳代男性と隠退した母親，羊 100 頭飼養），世帯番号 7（30 歳代の世帯主，羊 100 頭飼養，世帯主の妻は 8 歳・4 歳の娘の子育てに専念している）がそれにあたる。世帯番号 7 が農家として存続する可能性がある

ものの，他の 3 戸は高齢化したり，後継ぎがないため，農家として存続することは難しい。むしろ，世帯番号 2（34 歳の世帯主はアボンダンス種乳牛 32 頭飼養，その妻と母はチーズ製造・販売）が，家畜小屋を新築して，30ha の草地を経営しており，農業経営を拡張する可能性がある。

一方，世帯番号 1（専ら民宿を経営しており，農業は飼料の生産・販売のみ），世帯番号 4（世帯主 40 歳代，羊 200 頭飼養，母とともに民宿経営），世帯番号 8（50 歳代の兄弟で羊飼養，それぞれの妻とともに民宿経営）は農業と民宿を営んでいる。農業は，飼料の生産販売とか羊飼養である（羊飼養は乳牛飼養と比べて人手がかからない¹³⁾）ので，農業と民宿は両立し，その共生システムを構築すれば存続する可能性があるろう。

表11 セイヤック（Ceillac）集落の職業構成

世帯	世帯員 (20歳以上)	性別	年 齢 別 職 業 構 成							経営 草地	乳牛 頭数	羊 頭数	備 考
			20-29	30-39	40-49	50-59	60-69	70-79	80-				
1	世帯主 妻 子 子 子	男 女 男 女 女	肉 屋 理 髪 師	大 工 な し			民 宿・農 業 民 宿			10-20	0	0	飼料の 生産・販売
2	世帯主 妻 母	男 女 女				農 業 チ ー ズ 製 造 チ ー ズ 販 売					20-30	32	
3	世帯主	男					農 業			10-20	0	40	アルプ放牧 地利用
4	世帯主 母	男 女			農 業・民 宿			民 宿		10-20	0	200	アルプ放牧 地利用
5	世帯主 弟	男 男					農 業 農 業			10-20	0	150	アルプ放牧 地利用
6	世帯主 母	男 女				農 業			隠 退	10-20	0	100	アルプ放牧 地利用
7	世帯主 妻 父	男 女 男		農 業 な し					隠 退	10-20	0	100	アルプ放牧 地利用
8	世帯主 妻 弟 妻 父 母	男 女 男 女 男 女				農 業 民 宿 農 業 民 宿			隠 退 隠 退	10-20	0	85	アルプ放牧 地利用

資料）石原照敏の聞取調査（2000年 8 月）による

観光・定住集落の形成における人と組織

1. フィリップ・ラムール (Phillippe LAMOUR) 氏の役割

セイヤック・コミューンにおいてはフィリップ・ラムール氏がいなかったら観光・定住集落は形成されなかったといつてよい。

フィリップ・ラムール氏はノール県出身で、1903年生まれ、20歳代には弁護士やジャーナリストであったが、1942年には南仏のガール県Gardで農業者となった。1945年に戦争が終わり、農業総同盟 (Confédération Générale de l'Agriculture) の結成とともに、その事務局長となった。1950年以来、ラングドックの地域整備にかかわるようになり、1953年にはバ・ローヌ・ラングドック地域近代化・設備委員会の議長となり、1963年にはフランス地域開発委員会の議長となった。彼が、山や手つかずの自然、本物の生活に対していただいていた愛情がケイラ地域に興味を感じさせるように導き、セイヤック・コミューンの村長 (1965-1983) たるしめたという¹⁴⁾が、彼がセイヤック・コミューンの村長になった経緯については必ずしも明らかではない。

ラムール村長はまず手始めに小コミューンのわくはスポーツ・宿泊設備の管理・経営のためには狭小すぎると考えて、1966年にケイラ地方の8コミューンからなるケイラ職業複合化コミューン連合組合を結成した。次に農業所得の不十分さを観光によって補うことが必要であると考へた。そこで、フランス地域開発委員会の議長であったという地位と実力を生かして、国土庁 (DATAR) の農村刷新局の観光・定住集落 (Stations-Villages) 開発のプロジェクト (1967-1976) を導入したのである。この事業のために、農村刷新基金 (Fond "Rénovation Rurale")、地域整備基金 (Fonds d'Aménagement du Territoire) が利用された。また、とくに経営用建物を農家民宿 (Gîtes ruraux) に転換するためには農業省からの融資が利用された。これ

らの資金を利用して、経済活動を多様化することにより、農家の減少に歯止めをかけようとしたのである。

2. 組織の役割

セイヤックの観光・定住集落の形成において組織の果たした役割は重要である。フィリップ・ラムール氏の指導の下に、1966年に、8つのコミューン (Abriès, Aiguilles, Arvieux, Ceillac, Molines, Saint-Veran, Château-Ville-VieilleおよびRistolas) の間で、ケイラ職業複合化コミューン連合組合 Syndicat intercommunal à vocation multiple (S.I.V.M.) が結成された。

このS.I.V.M.は、二つの農業共同会社 Sociétés d'Intérêt Collectif Agricole (S.I.C.A.) と協定を結んだ。その結果、1983年まで、スポーツ 農業共同会社 S.I.C.A.-Sports (モリーヌMolinesに立地) はスポーツや観光設備の管理を委され、住宅 農業共同会社 S.I.C.A.-Habitat (Ceillacに立地) は、観光客の宿泊施設を整備することとなった。また、S.I.V.M.は、コミューンと完全に協調して行動すること、伝統的価値の尊重と望ましい拡張とを結びつけることなどを追求した¹⁵⁾。

スポーツ 農業共同会社は、上記組合に加盟したコミューンの中に設立されたリフトの管理と経営を保証している。リフトの中で最も重要なものは、Jillyのリフト (Abrièsのコミューン)、Peininのリフト (Aiguillesのコミューン)、Beauregardのリフト (Molinesのコミューン)、Jamberonteのリフト (Arvieuxのコミューン) であり¹⁶⁾、セイヤック・コミューンのメレーゼーにもリフトはあるが、規模が小さい。

住宅 農業共同会社は、民宿、賃貸アパート、別荘などを整備した。8つのコミューンで整備されたベッド数は、1980年に12,440に達した。このうち、セイヤック・コミューンでは整備されたベッド数が2,540であった¹⁷⁾。住民は土地の提供に比例して、これらの住宅の所有者または共同所有者となったのである。

むすびにかえて 観光業と農業
の共生システムの構築

セイヤックでは観光・定住集落の形成により観光が発達し、住民のために職業と雇用を提供したという点では観光開発は成功したといえる。民宿を媒介として観光業と農業の共生もみられ、農業者が維持した草地は観光業に重要なグリーンの景観として役立っている。しかし、観光業と農業の共生システムが構築されているアヴァンシェール・ヴァルモレルの場合¹⁸⁾とはちがって、表12のように農家の減少がより顕著であり、観光業と農業の共生の程度は弱い。

そこで問題になるのは、観光業と農業の共生を支える制度、つまり観光業と農業の共生システムが、セイヤックでは何故構築されなかったのかということである。

その理由として次のことがあげられる。第1に、セイヤックの農業は岩がちの山が多いという気候的・地形的条件から、きわめて生産性が低かっただけでなく、経営規模が零細であり、生計を維持するための糧が十分には得られなかったため、農業を放棄し、観光業に走るものが増加し、観光に偏ったため観光業と農業の共生の程度は弱いのであろう。徹底的な品質管理がなされ、高品質チーズという名声を博したボーホール・チーズを生産するムーチエ地域酪農協同組合への牛乳の出荷圏域に含まれたアヴァンシェール・ヴァルモレルで、農業経営の上向きの発展がみられるのとは事情が異なるのである。

第2に、地域外の資本が開発したため、観光業への地域住民の統合の条件（雇用における優

先権、農業への援助）について、コミューン連合区と整備開発業者との間で観光業と農業の共生システムが地域開発契約（観光業者から農業者への所得移転を内容とする）という形で締結されたアヴァンシェール・ヴァルモレルの場合とセイヤックの場合は異なる。セイヤックではケイラ職業複合化コミューン連合組合と、スポーツ・農業共同会社や住宅・農業共同会社との協定によって開発が進められ、土地所有者は持寄財産に応じて観光利用施設の所有者となり、農家が太勢としては観光業者になることを希望していたのであり、ソーシャル・ツーリズムのVVFなど以外は外部資本はあまり入っていないので、観光業と農業の共生システムの構築は地域住民によって望まれなかったと思われる。

第3に、セイヤックの観光開発が1967年に開始され、アヴァンシェール・ヴァルモレルの観光開発が1975年に開始されたことも、この問題と無関係ではないと思われる。1960年代の高度成長期に過度の観光開発がなされたために、景観の損傷や環境問題が発生したので、1970年代に入って、地域住民に利益を与える観光開発、農村の生活・文化と結びついた観光の重要性が認識されるようになり、観光開発政策が大きく転換し、観光業と農業の共生システムが構築されるようになった1970年代後半の時期とは異なる時期にセイヤックの観光開発がなされたことが重要である。セイヤックの観光開発は高度成長がまだ終わっていない1967年から実施されたため、農業と観光活動の結びつき、伝統的な農村景観と人文的価値の保持に留意されてはいるものの、地域開発契約という形で観光業と農業の共生システムを構築することの必要性は認識されていなかったものと考えられる。

しかし、観光業が発展し、農家が減少した今日、セイヤックでは観光業と農業の共生システムを構築することが必要になってきたのではなからうか。地中海性気候の下にあるセイヤックでは農業者がいなくなれば灌漑によってグリーンの草地を維持するものもいなくなり、草地は

表12 農業経営の減少

	アヴァンシェール・ヴァルモレル		セイヤック（ケイラ）	
	73 戸	100 %	34 戸	100 %
1970	73	100	34	100
1980	44	60	23	68
1988	31	42	18	53
2000	26	36	8	24

資料) 1970, 1980, 1988年はフランス農業調査による。
2000年は、筆者の調査による。

荒廃していくであろう。そうなれば観光業にとって必要なグリーンの草地景観が失われることになる。そこで、セイヤック・コミューン内部で、観光業から農業への所得移転により、農業者を維持する観光業と農業の共生システムの構築が要請されるのである。

注

- 1) Guillaume, Général A., *Le Queyras*, Gap Société d Etudes des Hautes-Alpes, 1985, p. 19.
- 2) Blanchard, R., *Les Alpes Françaises*, Paris: Armand Colin, 1952, p. 171.
- 3) Guillaume, Général A., *op. cit.*, p. 36.
- 4) Blanchard, R., *Les Alpes Occidentales, Tome Septième*, Paris, Grenoble: Arthaud B., 1956, p. 294.
- 5) Guillaume, Général A., *op. cit.*, p. 187.
- 6) ケイラ地域自然公園に参加した11のコミューン、プロバンス・アルプ・コード・ダジュール州は、自然、建築物、文化的・人間的な遺産の保存と開発に基づいた経済開発政策を推進する意志を表明した (Office de Promotion du Tourisme en Queyras, *Parc Regional du Queyras*, 2000.)
- 7) Guillaume, Général A., *op. cit.*, p. 183.
- 8) ギュイエストルGuillestreを中心に、その南にあるリズールRisoul、セイヤックCeillacの3コミューンは中世以来、ナポレオン3世による1864年の勅令公布時まで、森林と放牧地を共有していた (*Ibid.*, p. 134.)
- 9) Ceillacは " Ciel-lac " (Cielは天国、lacは湖の意) に由来するという (Fournier, C., *Ceillac: Là-haut sur la montagne*, Gap: Louis-Jean, 1994, p. 1)
- 10) Guillaume, Général A., *op. cit.*, p. 132.
- 11) Gauthier, Ch., Gemain, N., Guimera, P., Lacote, Th., Landemaine, S., Leclerc, M., Morel, M., Roger, E., Vanlauwe, C., Vasse, B., *Comment Concilier*

Tourisme et Production Laitière dans le Queyras?, Mission d Etude en Queyras, 1997-1998, p. 32.

- 12) Lamour, Ph., *Une Aventure ...: Les Amis de Ceillac*, Gap: Louis Jean, 1994, p. 27.
- 13) 羊は夏の間、クリスチャン川の上流付近とかメレーゼー川の上流、アン湖 (Lac Ste. Anne) 付近のアルプ放牧地 (標高2,700m) で放牧される。羊は番犬に守られて山の斜面を大群をなして移動しながら草を食む。羊飼いは常に羊の番をしているわけではなく、夕方には集落に帰ってくる。9月の初め、仔羊 (agneaux) が市場で販売される。冬の間は羊は集落の付近で放牧される。このようにアルプ放牧地と集落付近 (標高1,640m) との間を季節的に移動させて飼育する牧畜を地元ではトランスヒューマンスTranshumance (移牧) と呼んでいる (2000年8月、石原照敏調査)
- 14) Lamour, Ph., *op. cit.*, pp. 15-19.
- 15) Guillaume, Général A., *op. cit.*, p. 186.
- 16) *Ibid.*, p. 187.
- 17) *Ibid.*, p. 188.
- 18) 石原照敏「地域開発契約による観光業と農業の共生システム フランス・アルプス・ヴァルモレルの事例研究」『阪南論集 社会科学編』第36巻第4号、2000年3月、pp. 9-25.

【付 記】

本稿は、平成11・12年度 日本学術振興会科学研究費補助金 (旧文部省科学研究費補助金) ・基盤研究C「アルプスにおける観光業と農業の共生システム 日本の中山間地域と比較して」 (代表者 石原照敏 課題番号11680085) の研究成果の一部である。調査の際に、コミューン議員Emile GAUTHIER氏のお世話になった。記して謝意を表する。

(2001年7月19日受理)